
フラグを立てる条件

幻夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フラグを立てる条件

【Nコード】

N9799W

【作者名】

幻 夢

【あらすじ】

私雪城 沙穂璃は目立たない地味で平凡な生活を送っていた。なの・に少し非凡な同級生の超非凡なフラグに巻き込まれ、一緒に異世界にとばされてしまった。そして自分が望まぬ非凡なフラグが、何かのスイッチが入ったかのように一気に私に立っていく……。私
が立たいのは超平凡で地味なフラグなのにつ！！
不定期更新です

1 非凡な同級生のフラグに巻き込まれました……

私は教室の窓側の自分の席につき、外を見て溜息をついた。

梅雨に入り最近毎日雨だ。

別に雨が嫌いだった訳ではないが、雨に濡れて帰る日々が何日も続くことさすがに嫌になってくる。

「雪城さんプリント配るの手伝ってくれない？」

彼女は藤崎綾ふじさき あやと言って優しく可愛らしい私と同じクラスの、クラスのアイドルの存在の子だ。

一方私、雪城沙穂璃ゆきしろ さほりは存在感は普通よりちょっと低めで地味な眼鏡をかけた、よく言って普通、悪く言って普通よりさえないだ。

「ん、分かった貸して」

綾からプリントを貰い一緒に配り始める。二人とも配り終わった所で、綾から声をかけられる。

「手伝ってくれてありがとうー！」

「どづいたしまして、じゃあ………」

そう言って私は綾に背を向けて、スタスタと自分の席に向かって歩きだした。

一瞬綾が何か言おうとしたが、気にせず私は席に座って本を出し読み始めた。

彼女は私がいつも一人で居る事を気にかけて、何かと理由をつけて私に話しかけてくる。

さっきのもきつと『良かったら……ない？』とか何とか言おうとしたんだろう。

本を読んで少したった時、クラスの女子達の雰囲気が変わったので、本から目をはずして皆の視線の先を見る。

入り口の方に4組の那賀なが 陽太よしたがいた。

彼はクウォーターで、髪と目の色が染めていないのに明るい茶色をしている。

剣道部に入っていて運動が出来、その上頭良し顔良しで女子からの人気が高く、男子からは尊敬されている。

彼に恋する女子は数え切れない、しかしそのほとんどが気持ちを伝える事は無く心の内にしまっている。

彼のクラスは1組で、離れているこの4組に来る理由は女子達の中で決まっていた。

『藤崎 綾に会うため』この事をこの学年で知らない人はいない。

そして綾には敵わないとほとんどの女子が彼を諦めるのだ。

綾の方もなんだかんだで陽太に気があるようだ。

私は何時もの光景を見て、直ぐにまた本を読むのを再開した。

ちなみに今私が読んでいる本は『それなりに目立たず生きる平凡な人生・5巻後編』といって私の愛読書だ。

目立たない、これはまさに私のタグのような言葉だと思った。

放課後私は残って宿題を終わらせる事にした。

ガラッ

「あれ、雪城さん」

声のした方に顔を向けると、驚いた様子で綾が立っていた。

「雪城さんは帰らないの？」

「宿題終わらせて帰ろうと思って、藤崎さんは忘れ物？」

そう言うと綾は忘れてたと言って、自分の机に向かった。

綾は机の上に置いてあった携帯を鞆にしまって、私のほうに向かってきた。

「雪城さん！ 今日一緒にか「おい、綾帰ろうぜ」「……」

タイミング良く？ 陽太が教室に入ってくる。

綾は自分が言おうとした事をさえぎられて、怒っているようだ。

「もう陽太のバカ、せっかく誘おうとしたのにな」

「うわっ、なんだよいきなり」

その誘おうとした私の前で二人は争っていた。

ふと陽太が下を見て固まった、何だと思って私も下を見て直ぐ固まった。

綾もどうしたのかと下を見て固まった。

「なんだよこれ……」

「へっ何これっ！」

「……私の平凡な日常……」

私がそう呟いた時には、そこには巨大な魔法陣が現れていた。

そして三人の姿はどんどん薄くなっていく。

消える瞬間沙穂璃は思った……。

「変なフラグ立てるな……！」

2立つのは非凡フラグです

私の目の前では、変な儀式？ の格好をした脂ぎったオッサンと、オッサンが言うには勇者だと言う陽太と聖女だと言う綾がいた。

そして私はほぼ無視されている状態だ。

今の状態を一言で言うなら……。

勇者&巫女召喚に巻き込まれて異世界にとばされました。

オッサンは綾と陽太に愛想よく振る舞い、私の方など見向きもしなかった。

今私が立っているのは魔法陣の上で、この魔法陣から出ると言葉が通じなくなるらしい。

何はともあれ、おまけの私のここでの扱いはあまり期待できそうに無い。

オッサンの話によると、一ヶ月城に滞在する事になるようだが、その間に城を抜け出そうと思う。

綾はきつと一緒に召喚された私が居なくなって、心細くなるだろうが陽太が居るので大丈夫だろう。

召喚した迷惑な奴等も私が居なくなって喜ぶだろう。

でも抜け出す前にこの世界の事を学ぼう。

私達はメイドに案内され、それぞれ部屋に入っていく。

そして最後に私の部屋だ。

メイドが扉の前に立ち止まり、扉を開けてこちらを見る。

「
」

たぶん『どうぞ』と言っているのだろう。

私が部屋に入ったのを見ると、メイドはお辞儀をして去って行った。

直ぐに私は部屋にあるベッドに倒れこみ眠りに落ちた……。

3 溜息の度に幸せは消える

結局疲れてベッドに倒れこんだ私は、そのまま朝までぐっすり眠っていた。

起きてから私は、ケータイを見て時間を確認した。

5:31

思っているよりも早い時間に起きたようだ。

ちなみにケータイは転送される時に持っていた鞆の中にあつたもので、圏外になっているがしっかりと動いていた。

こつちとあつちでは時間の進み方が違うかもしれないので、気をつけた方がいいかもしれない。

コンコンッ……

「？」

扉をノックしたあと、相手が何か聞いてきたので私は返事をする。

入ってきたのは、昨日案内してくれたメイドだった。

肩までかかる銀色の髪をポニーテール結っていて、赤い目をしている。

綾のような可愛いと言う感じよりは、美しいと結う言葉が似合う美女だ。

そして今メイドは私をどこかに案内している。

ついて行ったけどそのあとは散々だった。

まず風呂場で身体をひりひりするほど洗われて、その次にシンプル（派手なのは即却下した）なドレスを着せられた。

コルセットが苦しい。

此处に居る間は毎日ドレスを着せられそうだ……。

私は分からないほど小さく溜息をつく、そしてメイドに次の場所へとまた案内された。

向かう途中城の人達がジロジロと見てきた……ジロジロと。

地味眼鏡女がシンプルとはいえオシャレな服装してるのがそんなに珍しいの？

メイドには眼鏡を外せ外せとジェスチャー送られたけど、この眼鏡外すと顔がばれてしまう。

それにこの地味な太い黒の額縁眼鏡は、私のお気に入りの平凡アイテムなのだ！……だけど、もう意味無いから（すで

に非凡)、ここ出をたら外そうかな?.....はあ。

きつと今も着々と溜息をつくたび私の幸せは逃げるいや、消えてっ
ているのかな?

はああ.....。

4 王家の方々と自己紹介

メイドに案内されたのは広間だった。

そこにはもう綾と良太がすでに来ていて、こっちの世界の人とペラペラと話していた、日本語で。

言葉が通じている理由はすぐに分かった。

この世界には私達のもといた世界とは違い、どうやら魔法があるようだった。

召喚された時点で最初は魔法があるのかと疑問に思っていたが、メイドが時々使うのを見ていたのであると確信した。

綾と良太の指に同じ指輪がはめられているのだが、あれが原因じゃないかと思っている。

そして今、私にもその指輪が渡されようとしている。

指輪は銀色の細い輪の形をしていて、細かく金色の文字が刻まれている。

私は受け取った指輪をはめてみた。

「私の言葉分かりますか？」

「……ええ、成功したようです」

この指輪は通訳の機能があるらしいが、なぜか分からないが他にもあるような気がする。

「申し送れましたが私の名前はアリアと申します」

そう言っアリア（メイド）がお辞儀をする。

「私は雪城 沙穂璃です。雪城と呼んでください」

私も名のつたところで質問をする。

「質問があるのですがいいですか？」

「私に答えられる事なら……」

「私のこのあとの事とこの世界の事を教えてください」

私がそう言つと、アリアは私をじっと見つめ話始める。

「このあと雪城様は王家の方々と朝食をとる事になっております。

この世界についてはその時に陛下がお話になられます」

「あと、城内を見て回ることは可能ですか？」

「ええ、場所は限られますが可能です」

「ありがとうございます」

時間が空いた時に図書室に行ってみよう。

綾と陽太と私は朝食の場に案内される。

扉の前まで来て綾がソワソワし出した。

「ううこれから偉い人に会うなんて緊張するよう」

「そんな緊張する事ねえよ」

陽太もそんな事を言っているが、やはり緊張しているようだ。

ちなみに私はずっと無言だった。

ギィ……

「どつぞ」

アリアはそう言って中に入った私達を見てから、中に入り壁に並んで立った。

私達はそれぞれ席に座る。

位置は私から見て右側が綾で、前に王妃とその左側に王子が座っていた。

綾の前に王その右側にもう一人の王子さらに右が姫で、綾の右が陽太とゆう席順だ。

王子 王妃 王 王子 姫
私 綾 陽太

悲しいかな……私がん無視だわ。

「まずは紹介する。私はウエルダ国王、ムーク・ドハ・ウエルダだ」

「私はウエルダ国王妃、エルダ・ドハ・ウエルダですわ」

王妃の左側から続けて王子。

「僕はウエルダ国第二王子、ルイス・ドハ・ウエルダだよ」

そしてもう一人の王子。

「私はウエルダ国第一王子、カイル・ドハ・ウエルダだ」

次にその右にいるお姫様。

「私はウエルダ国第一王女、ティティア・ドハ・ウエルダですわ」

王家の方々全員の挨拶が終わると次は私達の番だ。

綾と陽太はいつの間にか緊張が解けたようだ。

「あたしは藤崎 綾です」

「俺は那賀 陽太です」

「私は雪城 沙穂璃です」

私がしゃべったとたん、全員が驚いて私の方をみた。

空気扱い楽だったのに……。

「それでは私がこの世界の事について説明する」

そうして国王が話し始めた。

5 この世界のこと？え、私は知らないよ？

「それでは私がこの世界の事について説明する」

長い自己紹介が終わり、やっと本題に入った。

「この世界は 」（以下略）

とゆう事らしい。

国王が、長く語っていたこの世界の話を、私が簡単に説明しよう。

この世界の名前はフェーズガルド、魔力があふれ魔法の発展した世界。

人々は平和な生活を送っていたが、ある時人々の間で戦争が起きてしまった。

多くの生き物が苦しみ死んだ。

そして生き物の負の感情から瘴気が生まれた。

それから魔物の数が急激に増え、魔王が現れた。

人々は魔王を恐れ戦争を止め魔王を倒すことに専念したが、結果無理だった。

そして最後の手段を使う。

それは世界にあふれた瘴気を浄化する巫女を、魔王を倒す力を持った勇者を召喚すること……。

と言う事らしい。

その他の細かい事は一切話さなかった。

余計な情報は教えないつもりなのだろうか？

綾と陽太はこの話を聞いて、やる気が出たようだが警戒心が足りないと思う。

役目が終わった後も何も知らなければ、ただ良いように利用される可能性もありえるのに……。

しかし、余計な情報を教えないと言っても、それはあくまで勇者と巫女に対しての話だ。

私はあくまでオマケなのだから、図書室に言っても問題は無いはずだ。（そもそもだめって言われて無いけど）

この後案内してもらおうかな？……。

6 脱走計画

私は図書館に行き本を片っ端から読んだ。

今日は午前中はもう特に予定は無いようだ。

こちらの世界と元の世界との時間の進みはどつやら同じらしい。

ちなみに今は 10:45だ。

9時から本を読んでいたが、そろそろ図書館のすべての本を読み終わりそうだ。

10:50 ようやく図書館の本を全部読みきった。

これでこの世界の情報はある程度そろっただろう。

召喚されてからもうすぐ三週間がたつ。

そして私は明日朝早くに城を抜け出そうと思っている。

この三週間私は情報収集や、こっそり魔法の練習をしたりしていた。

綾と陽太と私で、魔法の教師に魔法を教えてもらう事もあった。

4：30 私はこっそり用意しておいたマントを黒のシャツとズボンの上に被り、通学鞆の中身（筆箱 ケータイ メモ）

を魔法でしまい机に日本語の書置きを置いた。

私は部屋の窓から外へ出て、塀を超えて森に入った。

警備が厳しかったが抜け出すのそこまで難しい事ではなかった。

覚えた地図によれば此処から西へ向かった所にブルーニカと言う国があるようだ。

取りあえず私はそこに向かう事にした。

転移……。

7 賢いオマケ（アリア視点）

召喚で神殿に現れたのは三人だった。

勇者と巫女以外の残った一人は、巻き込まれて召喚されたようだった。

勇者と巫女は陽太と綾と言っらしく、落ち着き無く混乱しているようだ。

一方オマケで召喚された地味な少女は、黒眼鏡をかけて黒髪を腰まで伸ばしていて、私にはここにいる誰よりも冷静に見えた。

少女は勇者と巫女に話しかけている神官や状況を見て、今の自分のオマケと言う立場を理解したようだ。

そんな少女に興味がわき、少女の世話を任せてもらえるようお願いした。

オマケの少女の世話役は直ぐに許可が下りた。

次の日朝早くに少女を起こしに行くと、少女はすでに起きていた。

お風呂や着替えなどをさせる間、少女がかけている黒縁の地味な眼鏡を外すよう進めたが、少女は嫌がって外さないの

諦めた。

少女の顔は眼鏡のせいでよく分からない。

外さないのはもしかしたら、顔を見られるのが嫌だからなのかもしれないと思った。

その後少女を広間まで案内し少女に、通訳魔法のある指輪の魔道具を渡した。

「私の言葉分かりますか？」

少女は指輪が魔道具だともう分かっているようだ。

「……ええ、成功したようです」

「申し送れましたが私の名前はアリアと申します」

私はそう言っつて少女が答えるのを待った。

「私は雪城 沙穂璃です。雪城と呼んでください」

どうやら少女の名前は雪城と言っらしい。

そして雪城が質問して来た。

「私のこのあとの事とこの世界の事を教えてください」

雪城の質問を聞いてようやく私の中で、雪城について一つ分かった事が出来た。

そうこの雪城は私が思っている以上に賢かったのだ。

きっと勇者や巫女よりもずっと賢い。

朝何時ものように私が部屋に雪城を起こしに行ったら、もうそこに雪城はいなかった。

私は机の上に手紙を見つけた。

四つ折にされたその紙には、見たことの無い文字が書かれていた。

私は急いで勇者と巫女のもとへ知らせに行った。

そして巫女に手紙を渡した。

手紙を開いて巫女は寂しげな顔をしてただ「そっか……」と呟いていた。

巫女は探さなくて良いと言っていたがそうは行かず、私は雪城の行方を調べた。

雪城に渡したあの指輪の魔道具は、通訳魔法の他に追跡魔法がかかっている。

しかし追跡した結果は、彼女の部屋の机の引き出しの中だった。

きっと何もかも雪城は分かっていたのだろう。

結局雪城の情報は見つからなかった。

私の雪城に対する感情は、興味心とほんの少しの尊敬の気持ちだった。

8 気になるあの子（綾視点）

あたしは最近気になる人がいる。

気になるって言うっても恋愛感情とかじゃなくて（女の人だし）、自分でもなんで気になるのかよく分からない。

席に座り私は窓側の彼女の席をちらりと見た。

そこに座っているのは、真っ黒な髪を腰まで伸ばした、地味な黒縁の眼鏡をかけた、よく言って普通悪く言って地味な女の子だった。

彼女の名前は雪城 沙穂璃と言って、あまり人と話さずよく本を読んでいる。

いつも一人で居るので、最初はそれが気になって声をかけた。

人付き合いが苦手なのかと思っていたがそうでもなかった。

あたしの知っている彼女は、普通でちょっと地味で本好きで、しっかりしていてそしてちっとも感情を見せない、そんな感じ。

それからよく分からないが、最初とは違う理由で彼女のことを気になってきた。

あたしは先生から頼まれたプリントを配る時とか、荷物を運ぶ時など事あるごとに彼女に手伝ってと言って話しかけた。

彼女からしたらいい迷惑だろうけど……。

自分で言うのもなんだが、あたしは人付き合いが上手い。

このクラスの雪城さんを抜いて全員と仲が良く、学年では半分以上の人が友達だ。

だから雪城さんとも直ぐに仲良くなれると思った。

でもいつまでたっても無理だった……。

放課後、私は忘れ物をとりに教室に向かった。

教室の扉を開けるとそこには雪城さんが居た。

「あれ、雪城さん」

驚いて思わず声をかけた。

「雪城さんは帰らないの？」

「宿題終わらせて帰ろうと思って、藤崎さんは忘れ物？」

雪城さんはしつかりしてるなうなんて思っていたが、彼女に最後に言われた事で自分が忘れ物をとりに来たことを思い出した。

そしてあたしは目的を果たしてから、雪城さんに思い切って話しかけようとした。

「雪城さん！ 今日一緒に「おい、綾帰ろうぜ」……」

そこにタイミング悪くあたしの幼馴染の陽太が入ってきた。

せつかくのチャンスが……。

「もう陽太のバカ、せつかく誘おうとしたのにつ」

あたしと陽太は言い合いになった。

しばらくして陽太が突然下を向いて固まった。

雪城さんも下を向いて固まっていた。

もちろんあたしも固まった。

そしてあたし達は異世界に召喚された……。

そして召喚されてからたぶん三週間くらいたった時。

メイドのエリアから突然雪城さんが居なくなった事を聞いた。

そして雪城さんの部屋にあった手紙を渡される。

紙には『藤崎 綾さんへ』と日本語で書かれていた。

手紙にはこう書かれていた。

『 藤崎 綾さんへ

この手紙が届く頃には、私はもうこの城には居ないでしょう。

きっと優しいあなたは私の事を心配するでしょう。

でも、私を探さないでください。

私は自分の意思で城を抜け出しました。

また会えたら、その時はまたお話をしましょう。

雪城 沙穂璃より

』

彼女が抜け出したことはショックだった。

でも話そうと、彼女から思ってくれた事があたしは嬉しかった。

「そっか……」

その時分かった、そっかあたしはずっと雪城 沙穂璃と、友達になりたかったんだな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9799w/>

フラグを立てる条件

2011年10月7日14時43分発行